

令和7年度 大学との連携事業 「つながる学び みと☆Future College」実施報告書

拠点校名 水戸市立常澄中学校

連携大学 茨城大学教職大学院

研究主題 自分の考えや思いを表現できる生徒の育成
～生徒一人一人が満足できる学びの工夫を通して～

1 主題設定の理由

中学校学習指導要領解説総則編では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の具体的な内容について、3つの視点に立った授業改善を行うことが示されており、その1つに、「学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる『主体的な学び』が実現できているかという視点。」が示されている。

本校では、昨年度、生徒の表現力を高めるために「相手の考えや思いを聴く生徒の育成」を目指し取り組んだ。課題として、学習意欲の高まりや授業への積極的な参加に課題が見られた。また、アンケート結果では「新しいことを知るの楽しいと思う」という質問に肯定的な回答は90%以上だったが、「自分は勉強が得意な方だと思う」「授業中、安心して発言できる」という質問に肯定的な回答をした生徒がそれぞれ、約43%、約67%である実態も明らかとなった。学習に自信がなく、安心して授業を受けられない、学習意欲が高まらないという現状から、主体的な学びを促進し、生徒が個々の目標や進路に向けて学習に取り組めるようになることが重要であると考えた。

以上のことから、生徒指導の実践上の4つの視点も踏まえながら、一人一人の生徒にとって満足できる学びに向けて授業改善しながら、自分の思いや考えを表現できる生徒を育成することができるのではないかと考え、本主題を設定した。

2 研究のねらい

生徒一人一人が満足できる学びの工夫を通して、自分の考えや思いを表現できる生徒の育成を追及する。

3 大学との連携事業の基本的な考え方

本校では、大学との連携事業「つながる学び みと☆Future College」における「学ぶ意欲の向上」という学びのテーマのもと、茨城大学院教職大学院と連携し、本校の研究主題について研究する。研究主題に迫るために、校内研修の在り方や授業改善、調査・分析等に対する助言をいただき、年度当初の研究計画にこだわらず、その都度、校内研修体制

や研修内容を見直し、より実態に即した校内研修の実践を図る。

4 具体的な取組内容

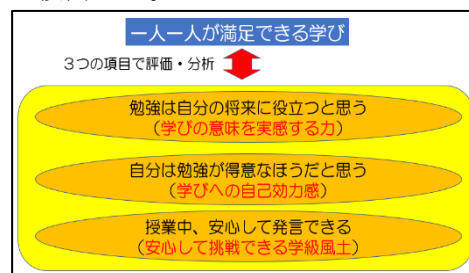
(1) 大学連携の実施計画

実施日	概要	内容	講師
5/20(火)	研究主任研修 (第1回)	・講話「校内研修の推進にあたって 考えておきたいこと」 ・グループワーク	高野貴大先生(茨大)
5/26(月)	打合せ	・第1回意識調査の分析、検証方法 の確認 ・研究計画の再考	高野貴大先生(茨大)
6/5(木)	要請訪問 (生徒指導)	・講話「生徒指導の実践上の4つの 視点を生かした授業づくり」 ・学年別による意識調査の分析	平野康太郎先生 (市総研)
6/16(月)	授業参観	・生徒の実態の共有 ・校内研修組織の改善、生徒指導部 員会との連携等	高野貴大先生(茨大) 長谷川真人先生(茨大) 鈴木稔先生(茨大)
7/11(金)	要請訪問 (道徳)	・研究授業の参観・助言指導 ・生徒指導の実践上の4つの視点を 示した指導案の作成	仲田敦子先生(市総研)
8/4(月)	講師による 校内研修	・講話「社会の変化に対応するため の術を身に付けた生徒の育成」に 向けて ・組織の在り方等について	高野貴大先生(茨大) 長谷川真人先生(茨大) 鈴木稔先生(茨大)
11/27(木)	要請訪問 (道徳)	・道徳的価値の3つの理解について ・第2回意識調査の分析	高野貴大先生(茨大) 仲田敦子先生(市総研)
1/16(月)	授業参観	・生徒の実態の共有 ・本年度の課題の整理と、次年度の研 究について	高野貴大先生(茨大) 鈴木稔先生(茨大)
2/9(月)	講師による 校内研修	・本年度の意識調査の分析と共有 ・次年度の校内研究について	高野貴大先生(茨大) 鈴木稔先生(茨大)

(2) 大学連携による校内研修の取組

① 講師との打ち合わせ：5月26日(月)

- ・本校の研究計画をもとに、目指す生徒の姿を具体化するために、「満足する学
び」が実現された姿をどのように評価していくか検討した。
- ・資料1の3つの項目で、5月と11月で生徒
の変容を比較し、「満足する学び」が実現でき
たかを、評価していくこととした。
- ・授業に取組めない生徒がいるため、生徒指導
の実践上の4つの視点を土台として、推進を
図ることとなった。そのため、水戸市総合教育
研究所の要請訪問を活用することとした。



資料1「満足する学び」の評価項目

② 生徒指導領域における要請訪問：6月5日（木）

- ・ 生徒指導の実践上の4つの視点を生かした授業づくりについて、講話をいただいた。①自己存在感の感受、②共感的な人間関係の育成、③自己決定の場の提供、④安全・安心な風土の醸成が、授業場面において具体的にどのような活動や配慮が該当するのかを助言いただき、自身の授業ではどのような手立てや配慮が、4つの視点に当たるのかを振り返り、先生方と共有することで日常の授業の活性化を図った（資料2）。



資料2 要請訪問（生徒指導）

- ・ 講話の後、各学年の実態調査を学年別に分析し、授業に生かすようにした（資料3）。

- ・ 3年生は、将来にどのようにつなげるか。学びとのつながり。（キャリア教育）
- ・ 2年生は、学級差がある。各学級の強みを生かすことと、シンプルな活動を意図的に取り入れていく。
- ・ 1年生は、自信がない生徒が多い。「安心して発言」の肯定的な数値が低いので、コミュニケーションや構成的グループエンカウンターを取り入れる。

資料3 各学年の分析結果

③ 茨城大学学術研究院 教育学野 講師 高野貴大先生による講話：8月4日（月）

- ・ 「社会の変化に対応するための術を身に付けた生徒の育成」に向けて講話をいただいた。
- ・ 講話では、組織とは①コミュニケーション、②貢献意欲、③共通目的、があればそれは組織だということ。「常中は組織と言えるか？」という問いから、3つの視点を重視し（資料4）、研修では、教師同士が話をする場を意図的に設定した。



資料4 講話の様子

- ・ 組織としての目的・目標を明確にした上で、トップダウンとボトムアップがどちらか一方ではなく、相互に関わり合いながら、実践していくことの重要について指導をいただいた。そこで、研究主任として、PDCAサイクルを意識しながら、研究の方向性を年度当初のまま実践していくのではなく、生徒の実態や現在の状況に応じて変化させながら、組織として同じゴールをイメージし実践していくようコーディネートすることを意識した。



資料5 学年別分析・イメージ共有

- ・ 鈴木稔先生からは、生徒を褒めるときのポイントとして「タイムリーに褒める」こと、授業の中でアウトプットをたださせるのではなく、「インプット→スループット（熟考）→アウトプット」を大切にすること、

という助言をいただいた。

- ・ 講話後、今までの実践について振り返り、成果と課題について共有した。各学年で共有した内容については、全体でも共有し、今後の指導に生かすようにした（資料6）。

◎問題行動等まだ課題はあるが、少しずつ言葉遣いなど改善する姿が見られた。
◎ネガティブ発言が減って、ポジティブ発言が増えた。
◎生徒間で声を掛け合い、授業で教え合う場面が見られた。
◎チーム常中として同じ思いや考えをもとに行動しているため、教職員が一丸と
なってきたと感じる。
☆あいさつに関しては、自らできない生徒いる。また、その日の気分で変わる。
☆生徒の個性（特徴）を褒めて伸ばせていない。
☆指導した際は意識できるが、長続きしない。→習慣化に課題がある。

資料6 各学年の分析結果（◎成果、☆課題）

④ 特別の教科道徳における要請訪問及び第2回意識調査分析：11月27日（木）

- ・ 要請訪問では、指導案の展開部分に、生徒指導の実践上の4つの視点のどこを意識して授業を行っているか記載した。本校では、ローテーション道徳を行っているので、全職員にとって良い学びとなる訪問だった（資料7）。
- ・ スケールやオクリンクプラスを用いて、自己決定の場の提供、共感的な人間関係の育成を意識して、授業を展開した（資料8）。
- ・ 進路と将来の職業をリンクさせながら、生徒自身が適切な進路選択ができるよう一生懸命考える時間となった。協議では、文章が長い題材のときに、どのように授業時間内におさえるか、箇条書き、キーワードをうまく使い情報を制限するのはどうかなど、有意義な話し合いができた。
- ・ 水戸市総合教育研究所指導主事から以下（資料9）について助言・指導があった。



資料7 授業の様子



資料8 スケールで可視化

◎生徒と関係が良好で素晴らしい。
◎受容的な姿勢⇔毅然とした指導、のバランスがきちっとしている。
◎生徒はワークシートに根拠や理由を添えて自分の考えを書いていた。
☆道徳の授業を行う際には、内面的な動機づけを大切にしてほしい。
☆学習形態を工夫すると、もっと多面的・多角的に考え議論する道徳ができるのではないかと。

資料9 各学年の分析結果（◎成果、☆課題）

- 第2回意識調査から、各学年の学力向上担当が分析して共有した（資料10）。

学年	今後の取組の重点
第1学年	<ul style="list-style-type: none"> ・「勉強は面倒だと感じることが多い」の項目で、「あてはまらない、まったくあてはまらない」10.1%減少 ・「先生は自分のことをわかろうとしている」の項目で、「まあまああてはまる」「とてもよくあてはまる」11.9%減少 ☆生徒の話をよく聞き、コミュニケーション重視の授業を展開
第2学年	<ul style="list-style-type: none"> ・「新しいことを知るのが楽しいと思う」の項目で、「とてもあてはまる」5.1%増加 ・「わからないことは先生や友達に聞いている」の項目で、「とてもあてはまる」9.4%増加 ☆自分の力を伸ばせる環境づくり、安心して過ごせる学校生活
第3学年	<ul style="list-style-type: none"> ・「先生は自分のことをわかろうとしている」の項目で、「とてもよくあてはまる」11.2%増加 ・「家で毎日、少しでも勉強している」の項目で、「とてもよくあてはまる」13.4%増加 ☆学びに集中できる学習環境、授業者と生徒の信頼関係の醸成

資料10 各学年の分析結果（☆：今後の課題）

- ⑤ 茨城大学学術研究院 教育学野 講師 高野貴大先生による講話：2月9日（月）

- 『「社会の変化に対応するための術を身に付けた生徒の育成」の今後に向けて』という内容で講話をいただき、本年度の取組の反省と残りの期間どのように指導改善を図っていくかを協議し、全体で今後の対応を確認できた（資料11、12）。



資料11 講話の様子

- また、企業経営の知見から、組織への参画意識を高めるためには、ビジョンや経営理念、戦略、戦術とも言うべき「合言葉」が重要で、それを基に、共通理解を図って実践することが、学校でも求められていると話があった。
- 生徒指導部員からは「各リーダーがビジョンをもってやることの重要性と、本質は経営と同じであることが分かった」と感想があった。



資料12 学年別協議

- 茨城大学 鈴木稔先生から、ウィリアム・グラッサー博士の主張する「身に付けたい7つの習慣」について教授いただいた。「身に付けたい7つの習慣」では、①傾聴する、②支援する、③励ます、④尊敬する、⑤信頼する、⑥受容する、⑦意見

の違いを交渉する、を基盤とすると、ポジティブな人間関係づくりにつながることであった。鈴木先生は、「無意識で実践していませんか」と先生方に質問し、「じっくりと時間をかけて関わってきた成果が、生徒の姿に現れている」とありがたい言葉をいただいた。

5 成果（進捗状況と今後の課題）

（1）本年度の成果

3つの評価項目	時期	①とてもよくあてはまる	②まあまああてはまる	③あてはまらない	④まったくあてはまらない	備考
勉強は自分の将来に役立つと思う	5月	54.9%	38.5%	5.7%	0.8%	・全体的に改善傾向 ・3年が大きく向上
	11月	63.9% ↑	32.2% ↓	3.4%	0.4%	
自分は勉強が得意なほうだと思う	5月	6.1%	27.9%	46.7%	19.3%	・①②が減少 ・④の増加（課題）
	11月	3.0% ↓	24.0% ↓	47.2%	25.8% ↑	
授業中、安心して発言できる	5月	22.1%	45.1%	28.3%	4.5%	・3割は不安がある ・④の増加(1年)
	11月	24.9%	42.5%	24.0% ↓	8.6% ↑	

資料13 実態調査の結果（5月、11月の比較、3%以上の変化は↑：増加、↓：減少）

資料13の実態調査から、生徒は「勉強が自分の将来に役立つ」と、学ぶことの意味を実感している生徒が増加している。さらに、「授業中、安心して発言できる」生徒が増加したことにより、落ち着いて学習が受けられる環境も整いつつある。しかしながら、授業中に安心して発言できないと不安を抱える生徒（学年差がある）もいる。また、学習に対して自信が無い生徒が多くいることも調査からわかった。

教師対象のアンケートからは、教師集団の一体感を感じられる、何をすればいいかが明確であるという意見があった。さらに、生徒指導の実践上の4つの視点を意識して授業実践している教員が95%以上おり、授業改善も図られてきている。

これらの結果から、「一人一人が満足できる学び」を実現するためには、できる喜びが実感できる教師の授業づくりや、安心して授業を受けられる学級環境整備の改善が必要であると考えられる。

（2）今後の課題

本校の研究主題のキーワードとなる「一人一人が満足できる学び」と、大学連携を通じた「学ぶ意欲の向上」に取り組むことにより、生徒の学びへの価値観や意欲の高まりが見られた。学びを進めると、壁にぶつかってしまい、学びへの自己効力感が低下してしまう実態も見られた。

このことから、今後は、生徒の学びが「自走する学び」となるように教師が伴走者として関わり、「わかった」「できた」の経験を増やすための授業づくりや、進路を意識しながら、生徒自らが主体的に学びを進めることができる生徒の育成を図っていきたい。